

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



CONTENTS

21 世紀 COE プログラム事後評価結果	2
お祝いと期待	山火 正則 3
21 世紀 COE 最終評価を受けて	池上 和夫 4
事後評価好成績からの思い出	福田アジオ 5
第 1 回公開研究会 報告	
非文字資料としてのポスターの保存と活用	6
第 2 回公開研究会 報告	
江戸学とビジュアルカルチャー — 異文化・美術・歴史 —	11

研究エッセイ

ESSAY

取り間違えられた火山噴火図	北原 糸子 15
史料としての写真絵葉書	田中 傑 19
只見町の“知恵”を発信するために	小松 大介 24
演説をいかに読み解くか?	高野 宏康 27

■海外提携研究機関・奨励研究制度 紹介	30
■主な研究活動	31
■Information	32

21 世紀 COE プログラム事後評価結果

文部科学省が世界のトップレベルの研究教育拠点の形成を支援するために行っている 21 世紀 COE プログラム事業について、この度、日本学術振興会より、平成 15 年度採択拠点の事後評価が公表されました。本学の「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、「設定された目的は十分に達成された」と評価されました。これは、事後評価において最も高い評価であり、25 の学際・複合・新領域拠点のうち、このような評価を受けたのは本拠点を含めて 6 拠点でした。

21 世紀 COE プログラム委員会における事後評価結果

総括評価

設定された目的は十分達成された

コメント

拠点形成計画全体については、日本常民文化研究所の長年の蓄積を生かしつつ、非文字資料の資料活用に関する理論的研究及び実践的手法を発展させ、国際的に利用しうる非文字資料のデータベース化が実現されており、設定された目的は十分に達成されたと評価できる。特に大学全体として、多様かつ強力な支援を行ってきたことは高く評価できる。

人材育成面では、人材育成の体制が必ずしも十分でなかった本分野において、博士課程在学者だけでなく、幅広い次世代研究者に呼び掛け、研究水準の向上と国際化に努め、学位取得者数の上昇傾向に見られるような具体的成果をあげており、大きな進捗が見受けられ、評価できる。

研究活動面については、非文字資料、特に絵引や身体技法の分析手法の深化とデータベース化に成果をあげており、本分野の国内外の研究者の知的基盤を拡大することができたことは高く評価できる。

補助事業終了後の持続的展開については、拠点形成期に蓄積された非文字資料に関する研究蓄積に加えて、「非文字資料研究センター」の設置など大学全体としての組織的支援強化が明確にされており、本分野の国際的研究教育拠点としての展開が可能である。特に非文字資料の多様な体系化方法やアーキビストの養成において、今後とも着実な発展を実現し、国際的拠点として確立することを期待する。

21 世紀 COE プログラム平成 15 年度採択拠点事後評価結果一覧

総括評価結果	医学系	数学、物理学、 地球科学	機械、土木、 建築、その他 工学	社会科学	学際、複合、 新領域	5 分野合計
設定された目的は 十分達成された	19 ^件	15 ^件	9 ^件	11 ^件	6 ^件	60 ^件
設定された目的は 概ね達成された	12	8	11	12	17	60
設定された目的は ある程度達成された	4	0	2	2	2	10
設定された目的は あまり達成されなかった	0	0	0	0	0	0
計	35	23	22	25	25	130

※各拠点の事後評価結果の詳細については、日本学術振興会 21 世紀 COE プログラムホームページ (<http://www.jsps.go.jp/j-21coe/>) を参照

お祝いと期待

神奈川大学法学部教授／前学長
山火 正則



21 世紀 COE プログラム事後評価において、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」事業が最高ランクの評価をお受けになりましたことを心からお慶び申し上げます。ここに示された人材育成・研究活動両面にわたる高い評価は、「教育と研究の融合」を理念のひとつとする本学にとって大いに誇るべきことであり、この事業立ち上げ当時の学長として誠にありがたいことだと思っています。福田教授はじめ、この事業に参加されたすべての皆様のご尽力に対して、畏敬の念を禁じえません。

この事業は、研究所として多くの優れた成果を積み重ねてこられた日本常民文化研究所、これを実質的な母体として設置され、短期間のうちに学位取得者を多く輩出するなど、この分野の研究者の育成に大きな成果を挙げてこられた歴史民俗資料学研究科を中心として構想・組織され、文部科学省に申請されたものでした。したがって、今回の高い評価は、このふたつの機関の評価にもつながるものであると同時に、日本常民文化研究所には、この事業を引き継いだ非文字資料研究センターの親機関として、これを立派に育てあげて、歴史民俗資料学研究科には、これまで以上に、この分野の研究者の育成に積極的に取り組むことを期待しているように思われます。

非文字資料研究センターについては、この事業の持続的展開として今回の評価の対象となっているところですが、いずれにしても、このセンターがこれを契機として更なる充実と進化をしつづけ、本学の目指す真に大学らしい・自立した風格ある大学を中心として発展されることを願っています。「非文字資料の体系化」という未開の学問分野を切り拓き、これに基づく独創的な成果を広く「人類文化の研究」の基盤として提示する—この特殊ではあるが普遍性をもつ研究は、やがて人類文化の研究に新たな視点と方法をもたらし、これを大きく前進させ、ひいては人類の福祉の増進に新たな展望を開くものとして、社会的に注目されることが予想されます。センターには、大いに期待しています。



21 世紀 COE 最終評価を受けて

神奈川大学副学長／21 世紀 COE プログラム拠点形成委員会委員長

池上 和夫

昨年 3 月をもって終了した 5 年間にわたる本学の 21 世紀 COE プログラムに対する最終評価が、昨年 12 月に公表され、「設定された目的は十分達成された」という高い評価を受けました。既にご存じのことと思いますが、このいわば A ランクの評価は、同じ学際等の領域、25 プログラムのうち、本学も含め 6 プログラムにすぎません。その上、さらに、A ランクの中でも特色があるプログラムとして本学のプログラムが取り上げられています。

中間評価においては、「当初目的を達成するには……一層の努力が必要と判断される」と評価されていただけに、最終的にこのような高い評価を受けた事は大きな喜びであります。

このような高い評価を受けたことは、なによりも、拠点リーダー、福田アジオ教授をはじめ、サブリーダー、研究遂行責任者、拠点事務局長など、実質的に運営を担ってきた研究推進会議の皆様方のご努力の賜物であります。さらに、事業を担った 20 余名の事業推進担当者のほか、COE 教員、COE 共同研究員、PD・RA などの COE 研究員、海外からの参加者などのご協力が大きな力となっております。あわせて心からお礼申し上げます。

ところで、改めて振り返ると、21 世紀 COE プログラムに本学が採択された 2003 年度（当事業開始 2 年度目）においては、申請大学 225 校、611 件、うち採択大学 56 校、133 件という厳しいものでありました。さらに、本学のプログラムの領域、「学際、複合、新領域」は、件数のみでみると、176 件中、25 件採択されたにすぎず、採択率は他の 4 分野に比べますと一段と厳しく、とりわけ、私学からの申請は、66 件に対して採択数はわずか 6 件のみであり、同領域の採択率は、国立の 2 分の 1 以下でありました。

鳴り物入りで開始されたこの事業は、2001 年 6 月の「大学の構造改革の方針」に基づき、国立大学の再編・統合、法人化とともに、第三者評価による競争原理を導入して、「世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援

し、もって国際競争力のある世界最高水準の大学づくりを推進する」趣旨のもとに創設されたもので、対象は国公立大学となっています。しかし、文科省の狙いは主に国公立、特に法人化にあわせた、国立大学を主体とした事業であったことは明らかであると思われます。こうした中で、本学のプログラムが高い競争率の中で採択され、しかも、最終評価において高い評価を受けたということは、誠に誇るべき、名誉なことでもあります。

とはいえ、重要なことは、もちろん、高い評価に驕ることなく、申請し採択されたプログラムの質・内容をさらに充実させ、発展させていくことであります。採択理由にある、「非文字資料の収集・整理・体系化は日本常民文化研究所とわが国唯一の歴史民俗資料学専攻大学院をもつ神奈川大学が拠点となることが最もふさわしい」ことをこれからも活かしていくことが肝要です。まさに、初心忘るべからず、であります。

最後に、国立大学法人などに比べ、教職員数等ひとつとっても限られた条件のもとで、このような「国家的事業」を遂行するためには、大学全体の支援・協力が不可欠なものでありましたが、幸い、最終評価においても「特に大学全体として、多様かつ強力な支援を行ってきたことは高く評価できる」と記されているとおり、事業遂行中は法人側からも十分ご理解いただき、財政面、支援スタッフなどの面で支援していただきました。この点に厚く感謝申し上げつつ、この 21 世紀 COE の成果を踏まえ、グローバル COE へ申請する当事業の後継組織・拠点である日本常民文化研究所非文字資料研究センターなど、関係機関に対しましてこれからも更なる全学的支援をお願いいたします。

尚、21 世紀 COE プログラム拠点形成委員会は、今回の最終評価の結果を俟って、規定により、一旦、廃止されますが、今後、全学的な教育研究活動がますます活発となり、当委員会に類する組織が再び必要とされる時が来ることを願ってやみません。

事後評価好成績からの思い出

非文字資料研究センター センター長／神奈川大学 21 世紀 COE プログラム 拠点リーダー

福田アジオ

2003 年度から 5 年間展開してきた私たちの 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、昨年 3 月に多大の研究成果を挙げて終了した。その成果については、当事者が自画自賛するだけでなく、COE 事業を推進した 21 世紀 COE プログラム委員会が詳細に点検し評価することで、社会的に認知されることとなっていた。2008 年の年の瀬が迫った 12 月に、待ちに待った私たちのプログラムについての事後評価が公表された。

事後評価は「設定された目的は十分達成された」というものであった。評価としての文言は素っ気ないものであったが、これは評価の 4 段階のうちの最高の評価であった。私たちのプログラムは「学際・複合・新領域」の分野において採択されていたが、この分野の全部で 25 件のプログラムのうち、この評価を受けたのは 6 件であった。単純に解すれば、上位 4 分の 1 に入る好成績だったといえよう。5 年間がんばってきた甲斐があったと言って良いであろう。しかも、公表された『〈平成 15 年度採択拠点〉事後評価結果報告（概要）』のなかで、分野毎に「プログラムの取組例」が特記紹介されたが、私たちのプログラムは学際・複合・新領域の取組例 4 つのうちの 1 つとして取り上げられ、紹介された。

この事後評価を得て、このプログラムに参加してくださった皆さんの 5 年間のご苦勞は無駄ではなかったといえる。反省するに、皆さんには無理難題ともいえる要求をした。21 世紀 COE プログラムは、いくつものテーマを設定して、共同研究を展開してきた。学際・複合・新領域は、共同研究が殊に期待され、また要求される分野であった。しかし、私たちのプログラムの中核を担う研究者は人文科学に属する人が多かった。人文科学では研究は個人で行い、仮に研究の過程で他の研究者と協力することがあっても、成果はあくまでも個人として出し、個人に属するという考えが強く支配してきた。5 年前を振り返れば、その個人研究センターの考えがもたらした不協和音の大きかったことが改めて思い出される。しかし、

2 年目、3 年目とプログラムが進行するなかで、次第に共同研究にも慣れ、共同で研究し、共同で成果を挙げることに疑問を感じる人も少なくなった。その結果、共同研究としての実をあげ、20 冊近い最終成果報告書の刊行として見事に結実した。

さらに、思い出すに、申請段階の皆さんのご苦勞が昨日のごとくよみがえってくる。2002 年 9 月に申請することが計画された。そのため慌ただしい日々となった。歴史民俗資料科学研究科で 3 人の検討委員が選出され、計画作成にあたった。橘川俊忠、中島三千男、福田アジオであった。3 人の度重なる検討の結果、歴史民俗資料科学研究科と日本常民文化研究所の実績を前提にして世界的研究拠点を形成できる課題は「非文字」しかないということになった。それを具体化する過程で、香月洋一郎、佐野賢治、田上繁が加わり、そして中国言語文化専攻の皆さんの協力を仰いだ。申請書作成には、日本常民文化研究所の職員の皆さんにも加わっていただき、まさに昼夜兼行の作業であった。特に、予算の積算作業は、私たちにはあまりに巨額であり、慣れない仕事であった。職員の方々の緻密な計算があって、間違いのない計画書が作成できたといえる。連日、風邪をおして出勤し、夜遅くまで取り組んだことが懐かしく思い出される。

事後評価の好結果を得て、5 年間の事業について思い出すことは多い。事業推進担当者、共同研究員、COE 教員、調査研究協力者の皆さんが、共同研究に邁進されたこと、国際シンポジウムや公開研究会に参加して下さった世界各地の研究者の皆さんが himoji を高く評価して下さったこと、そして PD、RA として研究に加わった若手研究者の方々が、研究の進展にさまざまな形で貢献して下さったことなどである。そして、5 年間、自分に優しく、他人に厳しい研究者の集団を支え、間違いなく研究が進むように配慮して下さった COE 支援事務室の皆さんはじめ、神奈川大学関係者の皆さんにあつくお礼を申し上げたい。

非文字資料としての ポスターの保存と活用

日 時：2008年10月25日（土）13：00～18：00

会 場：みなとみらい KUポートスクエア

報告者：田島奈都子（姫路市立美術館学芸員）

廣田元（高島屋史料館学芸員）

奥野進（函館市中央図書館奉仕・歴史係）

貴志俊彦（非文字資料研究センター研究員）

司 会：大里浩秋（非文字資料研究センター研究員）



報告 1

総論：ポスター研究の 現状と課題

田島奈都子（姫路市立美術館）

近年、戦前期に制作された日本製ポスターについては各方面で関心が高まりつつあり、これまで複製芸術に対して消極的であった美術館でさえ、ポスターを「作品」として収集、保存、展示する傾向が見られるようになってきている。しかし、実際のポスターに対する調査研究が進んでいるかといえば、必ずしもそうではない。

たとえば、公的機関で収集対象となる作品は、国内ものよりも海外ものが優先され、前者の場合も、作者や制作年が特定できるものや、現存する企業のものに偏っている。また、ポスターに関しては所蔵していることを公にしている機関が少なく、所蔵していても館蔵品目録を編集、公開していない機関が圧倒的に多い。このため、ポスターに関しては国内における作品の収集、保存の実態さえ十分に把握できておらず、目録の採り方も標準化されていない。この背景には、ポスター自体の歴史が浅いわが国では、それが研究されるべき対象として長らく認知されてこなかったこと、そしてその結果として、ポスターについて体系的に学べる専門教育機関が存在しないことが大きな影を落としているといえる。

今後のポスター研究においては、基礎となるポスターの所蔵および制作実態（現存していない作品を含む）の全容把握を、当時刊行されていた新聞・雑誌、写真資料等にも情報を求めながら、努める必要があるであろう。それと同時に、各機関で見解の異なるポスターに関する



作者や制作年といった基礎的情報の突き合わせ作業を進めていくこと、そしてその情報を広く共有化することが急務であり、関係各機関にはその実現に尽力してもらいたいと思う。

なお、ポスターが「広告」「美術」「メディア」「印刷」など、多様な要素によって成り立っていることを考慮するならば、学際的に研究すべき対象であることは明らかである。また、個人レベルでの作品収集や調査・研究が進んでいる、絵はがき、マッチラベル、写真、プロマイド、新聞・雑誌広告などの研究・調査動向とも関連づけていく必要があるだろう。

現在は、インターネットやデジタル技術が発達し、一昔前に比べてカラー画像を伴う情報の蓄積や共有化が簡便におこなえるようになってきており、ポスターについてはより多くの人が関心を持ち、また歴史資料としての活用が図れるようなシステムの構築とその登場が待ち望まれる。ただし、運用に当たっては現状でもさまざまな課題が見えており、利用する側のモラルも含めて検討すべき点は少なくない。



図1



図2



図3

図1 高岡商業学校で開催された「広告資料展覧会」の会場風景（『実業界』第6巻第6号、1914年）

図2 花本酒造のポスター。同社の商標である富久娘にちなんだ岡目の図柄。

図3 車窓越しに見えるのは当時の大日本麦酒株式会社の恵比寿工場（現在の恵比寿ガーデンプレイス）。近代的な工場は地域のランドマーク的な役割を担っていた。（1912～15年）

報告 2

企業史料館としての立場から： 所蔵ポスターの保存・修復・公開

廣田 元（高島屋史料館）

高島屋史料館にあるポスターは、これまで他の美術品とは違いあまり丁寧な扱いをされていなかった。じつは、3年前に姫路市立美術館からポスター貸出の申し入れがあり、該当のポスターを点検したところ、作品の汚破損を指摘され、展示と長期の保管に耐えられる補修の必要性から、専門家の助言を入れて徐々に改善していくこととなった。

保存については専用棚の購入や専用ポリエステルファイルと中性紙による保護を一部実施し、補修については長期の展示に耐えうるように、人気のあるポスターから順に次のような補修をおこなった。

1. ポスター表裏面のドライクリーニングや洗浄によって汚れや作品の劣化に関わる汚損物を取り除き、シミの原因である背面のテープや接着剤、ラベルを除去した。

2. 破断面を接合し、欠損部分に和紙を補い、審美的なバランスを強化したのち和紙で裏打ちをする、状況により破損、剥落箇所にセルロースの粉末を注入し接着剤で固定して、着色、補彩することによってポスターの特徴を生かせるよう「化粧直し」をおこなった。

姫路市立美術館への貸出し以降、美術館や印刷博物館と関係ができ、ポスターだけでなく、チラシ、カタログなどの情報や史料館が所蔵している以外の作品の情報が得られるようになった。また、行方不明であった作品の所在やデザインが判明した。とくに次の3点は顕著な一例である。

1. 関東大震災で全焼した南伝馬町店（東京店）の営業再開ポスター。現物はアド・ミュージアム東京が所蔵しており画像の提供を受けて展示した。
2. 北野恒富の半裸の美人画に与謝野晶子直筆の歌が書かれ、電停に貼るとその夜のうちになくなってしまったという伝説のポスター。このコレクターが判明し、今回借用することができた。
3. このコレクターはまた、「東京日本橋店新築開店」



(昭和8年)のポスターをもとにして作られた絵葉書を所蔵しており、原画と絵葉書をもとにポスターを復元・展示することができた。

企業史料館としては、専門家や関係資料館との連携が必要であり、こうした情報の共有化を通じて、ポスター自体の収集や修復も進めていかなければならないと考えている。

図4



図4 ポスターの補修(補彩)前(左)と後(右)の比較

図5



図5 矢の根五郎 俳優衣裳陳列会
大阪の美人画家北野恒富の作。インパクトのある濃厚な配色は当時議論を起こした。「矢の根五郎」は市川家の十八番で市川左団次の屋号は「高島屋」だった。(1919年)

図6

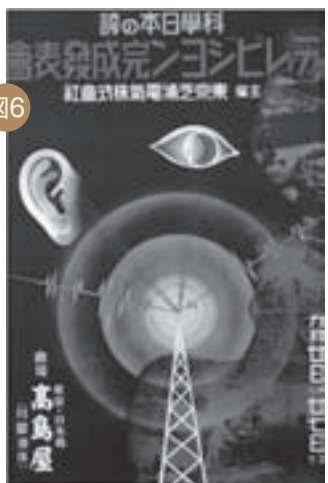


図6 科学日本の誇 テレビジョン完成発表会
東京日本橋店で日本初めてのテレビの公開実験放送が放映された。(1939年)

図7



図7 京舞妓 若松
北野恒富の作。高島屋東京南伝馬町店開店ポスターで「京呉服」をブランドとして強く打ち出した。(1916年)

報告 3

公共図書館としての立場から： 所蔵ポスターのデジタル・アーカイブ化の試み

奥野 進(函館市中央図書館)

アイヌ絵「御味方蝦夷之図(イコトイの図)」を模写した1枚のポスターがある。1936年に市立函館図書館館長岡田健蔵(1883~1944)が館員に命じて作らせたもので、朝鮮龍山図書館勤務の林靖一がかつて函館図書館の発行する印刷物を見て「“美の観念”に貫かれた精神は何とも愉快」(1934年・岡田宛の書簡)と評した意識の象徴ともいえる作品である。

岡田は「図書館人」の枠を越え、図書の収集だけでなく、博物館・図書館の設置を見据えて、資料を網羅的に収集、北方資料の宝庫と称される「郷土資料」の基礎を築くほか、地域資料の範疇を超える多くの「非文字資料」を残した。自ら地元新聞に寄稿して地域の歴史を紹介したり、展覧会を開催して展示目録を作成したり、最新の目録技術を導入したり、資料保護のために保存容器を導入したりと、残された物・記録からはその多彩な活動をうかがうことができる。なかでも冒頭の評にもあるように、自館で発行する印刷物にも深いこだわりを見せていたようで、非文字資料の蓄積の背景にはこのような意識が影響したと思われる。

ここで紹介したポスター資料もそうして残された資料群の一部で、「図書館」の整理・分類を超える資料群と



図8 函館市中央図書館「デジタル資料館」のトップページ
http://www.lib-hkd.jp/digital/index.html



図9 館内の展示スペースを利用した資料紹介展。整理状況の向上とともに、講演会・展覧会等を開催し、市民の目を楽しませている。

図10 港まつりアイヌ絵画展覧会のポスター。岡田の命により館員大垣友雄が図案作成を行った。市立函館図書館 函館辻印刷所（1936年）



して、目録もなく公開もすすんでいなかったが、函館市史編さん室（当時）と市立函館博物館が中心となって2002年に資料画像をインターネット上で公開、2006年にはデータベース形式への転換を行った。莫大な未利用資料（多くは非文字資料）の整理・公開にデジタルデータを活用して、①資料の保存・利用の両立、②「非文字資料」の内容公開、③低コストでの目録化、を効率的に行えるシステムの構築が有効と考えたからである。

2003年には、図書館も主体的にデジタル・アーカイブ事業に着手、公立はこだて未来大学の協力により、古写真・絵葉書のデジタル化を開始、ポスターデータベースの成果を吸収するとともに2008年4月には事業成果を公開する総合的デジタル・アーカイブ・サイト「デジタル資料館」を開設した（http://www.lib-hkd.jp/digital/index.html）。これら一連のデジタル・アーカイブ化にあたって、「資料」を持つ所蔵機関として、「知識」を持つ大学等の研究機関との連携を深めて共同研究方式を採用、特殊な技術や機械を使用しない、技術的・経費的に他の市町村レベルにも転用できる実用的デジタル・アーカイブの構築を目指している。

報告 4

教育研究機関としての立場から： 満洲(国)ポスターの学術利用の事例

貴志俊彦（神奈川大学経営学部）

この10年近く、私たちは満洲国関係の画像資料を求めて、祐生出合いの館（鳥取）、函館市中央図書館（北海道）のほか、日本各地の資料館をめぐり、株式会社コンテンツ（岡山）などと撮影をおこなってきた。そして、それらの画像データをもとに、京都大学地域研究統合情報センターを拠点とするH-GIS研究会で議論し、株式会社ヒューマンオーク（京都）と協同してデータベース・システムをつくり、2006年3月ようやく神奈川大学のサーバーを用いてウェブ上で公開することができた。しかし、私たちが実際にデジタル化できたのは、いまのところポスター176点、伝単167点、合計343点にすぎない。この種の「満洲熱」を確認できる画像資料は、まだまだ日本に眠っている。

日本が満洲にかかわり、画像資料を残し始めたのは、



日露戦争を契機としていた。当時、絵はがきが、現在の新聞に代わるニュースソースであった。そして、戦後、新聞の広告や旅行社のポスターによって「満洲熱」が高まった。その結果、新聞社は満洲や朝鮮を巡回する団体旅行を企画し、各種学校はこれらの地域への修学旅行を積極的に進め、さらに日本や満洲では各種の実業・物産博覧会が開催された。「満洲熱」は、日露戦後にもてはやされた画像メディアや歌謡曲などを通じて日本人の間で急速に浸透していき、1932年の「満洲国」の建国、1937年以降の日中戦争によって、フィーバーどころか、狂乱とでも表現すべき事態にまで達した。

上述したデータベース公開後、著者は①2006年11月に箱根で開催された「日中戦争の国際共同研究」第3回国際会議、②2007年8月韓国・安東大学で開催された満洲学会の年会、③2007年10月カリフォルニア大学バークレー校で開催されたPNC ECAI 2007 Annual Conference and Joint Meetingの一セッション「地域情報学Ⅱ：地域研究に対する空間情報解析システムの応用」において、データベースおよび満洲国のポスター画像資料にもとづいた報告をする機会を得た。こうした研究成果の発表によって、このデータベースは徐々に国際的に周知されることになった。その結果、2007年10月、ニューヨーク州にあるスキッドモア・カレッジのアニカ・カルヴァー氏から、このデータベースを同大学の日中関係史の授業に利用しているとのメールが届いた。その後、シカゴや釜山、台北な

どもからも利用確認のメールが届いた。当初考えていたように、このデータベースは教育や研究の素材として国際的な学術貢献に細々ながらも寄与しつつある。

なお、報告については、おもに貴志俊彦「戦争とメディアをめぐる歴史画像デジタル化の試み—満洲国ポスター&伝単データベース—」（『アジア遊学』第113号、勉誠出版社、2008年8月）をもとにおこなった。



図11 「満洲国とメディア」データベースのトップページ
http://kishi01.kanagawa-u.ac.jp/poster/



図12 満洲国建国1周年を記念するポスター（祐生会いの館所蔵）
ポスターの下端には、奉天省公署印刷局作成の「慶祝建国周年記念」第4号とある。満洲国の「五族共和」を象徴する画像だが、ボールを持ち上げるひとりがロシア系の人物になっているところが興味深い。



図13 ミス満洲をモデルとしたポスター（祐生会いの館所蔵）
満洲国建国を祝う国务院情報処製作のポスター。モデルが着ているのは満洲国の国旗を象徴するもの。実はこのモデルが日本人であることが最近朝日新聞の調査によって判明した。



図14 ドイツ語による満洲国物産絵図（祐生会いの館）
満洲国の資源や物産、交通や地形をあらわした絵図。ドイツ語ですべて表記されている珍しい一枚。ドイツが満洲国を承認したのは1938年5月。それ以降満洲国の宣伝のために使われたものか。製作者不明。

江戸学とビジュアルカルチャー

—異文化・美術・歴史—



絵画から見透かす江戸文化論

日 時：2008年11月22日（土） 13：30～16：00
会 場：神奈川大学横浜キャンパス23号館204会議室
講 師：タイモン・スクリーチ
（ロンドン大学アジア・アフリカ研究院教授）
コメンテーター：出光佐千子（出光美術館学芸員）
司 会：北原糸子（非文字資料研究センター研究員）



はじめに

——明治期に作られた「江戸」概念——

明治政府が創った江戸の解釈が、今でも非常に根強く残っているが、このような明治期に作られた江戸解釈を考え直さないといけない時期に来ている。しかし、現代、江戸を研究する人であってもいまだ150年前に作られたレンズを通して江戸を見ている。

では、なぜそうなったのか。明治の歴史観として、日本はアジアの国の中では例外的にヨーロッパと同じパターンであるという前提に立ち、「脱亜」、つまりアジアから脱すべきだという主張が強く、明治の歴史家たちも日本の歴史を書くときに、日本はアジア的な国ではないということを見せようと考えた。このような日本の歴史の解釈、江戸の解釈は間違いである。

スクリーチ流「江戸学」のキーワード

江戸時代は社会における宗教心は弱くなったと一般的に考えられている。しかし、実は宗教心の強い時代であった。もう一点は、封建的身分制は実質的には崩壊して、少しずつ侍の文化、上流文化、武士階級の文化が面白くなって、町人文化だけが面白くなると考えられている。これも表面的な理解にすぎない。さらに、三点目として、ここ20年間ぐらいの研究成果により、江戸時代は鎖国ではなかったという説が一般的になったが、明治はオープンで江戸はクローズというように明白に対比させるのは間違いであり、外国との交流がほとんどなかったわけでない。以上が現代まで続く江戸学の三つの大きな誤解である。

*宗教心の強い江戸時代

江戸の都市設計は陰陽道に基づいて作られた。江戸城の北東にある浅草観音はいわゆる鬼門にあたる。これは、陰陽道、中国的に言えば風水の考え方に基づいている。浅草寺は古代から存在する寺だが、江戸城の鬼門にあたるので、徳川幕府はそれを利用して都市設計をしたのである。陰陽道による考え方から、丘のような高いところにある鬼門の守りをさらに固めるために寛永寺が建立された。こうした都市設計に埋め込まれた思想から、江戸時代の支配者には宗教心が強いと考えるのである。要するに、江戸というのはマジックの下で設計された都市であり、とても近代科学的な発想から作られた都市だとは言えない。

また、家康は死ぬときに神格化されて東照大権現と名乗るが、東照大権現の本地仏が薬師如来であるということ、また、死後200周年の法事でも薬師如来像が描かれている点などは、宗教心が持続している証拠である。

*江戸の上流文化と町人文化

町人文化が面白くないと言うつもりは全くないが、ここではなぜ上流文化がそれほど軽視されたのかということを考える。美術史家としての立場から、江戸の上流文化としての狩野派をみれば、彼らはその時代、芸術家ではなく歴代の殿様の肖像画や結婚式のプレゼントとして絵を作る職人、あるいは役人であったということである。大広間で繰り上げられるイベントの大道具の制作者であって、これらをアートだと考えるのは間違いなのだ。だから、歴史家・学者であれば、その当時、何が重要だったか、なぜそれが重要とされたかということを考えない



といけない。狩野派は現代の目から見ればつまらないかもしれないけれども、そのつまらなさがものすごく面白いというふうに考えるべきである。江戸の大衆文化は、今でも見てすごく楽しいと思うかもしれないし、上流文化が面白くないと思うなら、その面白くなさがどこから来るかと考えることから面白みが出てくるのではないか。

*鎖国はほんとうにあったのか

三つ目の誤解は、江戸は鎖国であったということだ。今までの20年間はオランダ、中国、韓国との交流を研究してきた。

これは長崎（出島）の食卓の絵である（図版1）。オランダ人のカピタンと何人かの西洋人が食事をしている。西洋人の食べ方や楽器の弾き方、あるいは遊び方といった風俗は日本人の注目を浴びていてよく絵に出てくるが、この絵を選んだ理由は、ナイフを使って、食べているのは豚の頭である。日本の食卓でこのように豚の頭がぼんと出てくることは全くあり得ないし、ナイフでさえ日本の食卓に出てこない。このことについて、ナイフと切る文化について『江戸の身体を開く』という本を書いた。ナイフでものを切ることが西洋文化の一つの特徴だとされていて、特に医学は蘭学の中の重要な研究対象であった。西洋の医学と日本の医学の一番の違いは、体を切るか切らないかにある。そこから解剖学が成立、日本も中国も韓国も、遺体を切ってしまうという習慣が全くなく、死んだ体を開いて見ることは全く意味のないことだと一般的に思われていた。『解体新書』はものすごく有名な本だが、一番よく言われるのは、最初の日本語訳された西洋の本も、日本語で書かれたのではなく、漢文訳であった。しかし、絵は理解できるので、輸入された『解剖図譜』などの医学洋書が日本でよく読まれ、模型なども輸入されていたのである。

*二つの骸骨図—ヴェサリウスと円山応挙

最後に、ポスターに出てくる絵の二つに少し触れたい。西洋の医学者ヴェサリウスはイタリアの16世紀の名医で、最初に骸骨を作った人物。彼が書いた本はそのときから今まで400年間、1回も絶版になっていない。彼は、人間とは一体どのようなものか理解するために、神の形に似せて作られた人間が分かれば神様に近付けると考えた。3代将軍徳川家光時代の大目付井上政重は、島原の乱の弾圧に力を発揮した反キリストの人物で



図版1 タイモン・スクリーチ氏の講演時の図版から引用

あったが、西洋の研究書をたくさん持っていて、ヴェサリウスの本も持っていたという記録が残されている。

ヴェサリウスが描いたこのお墓の側に立って頭蓋骨をみて考えている骸骨のポーズはロダンの有名な「考える人」と同じポーズで、非常にシンボリックなものだ（図版2）。

最後の絵は、円山応挙のもの（図版3）。彼こそ上流階級のために絵を描いたため、現代の人にとってはつま



図版2 人体骨格図：ヴェサリウス著『人体の構造について』（原著1555年第2版）より引用



図版3 「波上白骨坐禪圖」兵庫県大乘寺（応挙寺）所蔵

らない画家という評価があるが、もちろん本当はつまらない人物である。応挙本人は医学実験を全くやらなかったが、医学洋書をたくさん所持していた。ヴェサリウスの絵はキリスト教的な骸骨が自分の存在を考える絵であり、応挙の絵は仏教的な表現ながら同じ点がある。応挙は宗教心が強い人で、蘭学者ではなかった。応挙を研究すれば、江戸の三つの大きな誤解を考え直すことができると思っている。一つは、上流階級のための絵を描いていたこと。二つ目は、ものすごく宗教心が強い人だったということ。三つ目は、海外の影響を受けて、ただエキゾチックだと思って西洋のことを考えるのではなく、本当に深く心の中で対象を捉え、深い意味で日本の絵画を変えた人だと思っている。

本日話したかったことは、江戸学というのはどこから来たかということであり、無意識に昔の人が作った方向に行ってしまうのではなく、その学問がどこから来たか、どのように確立されたかということを考えた上で、特に学生の皆さんは将来の人間ですから、そういうことを考えた上で将来に研究を進めたいと思います。ご静聴ありがとうございました。（文責 北原・高野）

出光佐千子氏のコメント

ロンドン大学に留学中にスクリーチ先生の授業を受け、実際にご指導を受けた一人として、日本の美術史学の現状をヨーロッパやアメリカで主流となりつつあるニューアート・ヒストリーの方法と両方学べる機会が得られた。自分にとって目からウロコが落ちるような発見があった。

*伝統的美術史とビジュアル・カルチャー

伝統的な美術史教育を体験的に語ると、作家研究・作品研究の方法の基本は、感銘を受ける作品との出会い、次に自分が惚れた作品や作家の資料調査をして、作品の紹介カタログ、次いで、書簡や日記といった一次資料を徹底的に読んで、自分なりの作家像をつくり、その上で作品の造形表現の研究を重ね、時代とともに変化する自律的な展開を考えていく。これがいわゆる1915年に、ウェルフリンが学問的基礎を与えた様式論であり、この方法が日本で美術史を研究する際の王道であった。今も日本のほとんどの大学ではこの基本的な方法を採用していると思われる。

日本でも美術史を学ばれたスクリーチ先生は、いわゆ

る日本美術史の古い方法にも知悉しておられ、専門領域をビジュアル・カルチャーとされている。スクリーチ先生は1980年代からハーバード大学のノーマン・ブライソンをはじめとしてアメリカを中心に台頭してきた新しい美術史研究の方法、いわゆるニューアート・ヒストリーの手法で、美術作品を資料的に用いてそこから社会現象を読み解き、新しい日本の歴史像を提唱し続けている方である。つまり、スクリーチ先生はニューアート・ヒストリーを日本美術史研究に持ち込んだ第一人者である。

今日のお話は、「脱亜」意識がキーワードになっている。明治期の「脱亜」意識によって現在まで江戸学がどう形成されていったのかという大きなテーマを視覚的な問題から論じられた。自分は池大雅を研究するなかで同じ疑問を感じ、「鎖国」論に戸惑いを感じるようになった。池大雅の波濤図は必ずしも「写実」ではない。現代の美術史は、美術品だけに注目しがちだが、それだけでは池大雅のような文人画の持つ意味が理解できない。他の学問分野の成果を取り込んでいく必要があることを、留学中に痛感した。どういう対象を選択するかによって研究方法が変わってくる。自分に合った方法を工夫していく必要がある。この点は、これからの美術史にとって



重要である。以下、スクリーチ先生の講演内容について質問したい。

* 骸骨図の解釈をめぐって

①円山応挙の「波上白骨坐禅図」について。従来の美術史では、美しくないという理由でとりあげられてこなかった。日本の美術史の方法では、応挙のヴェサリウスの書物についての素養に気が付く前に、この絵が描かれた年代および時代背景を調べる、といった作家論的な関心が向けられるが、スクリーチ先生はこのような点についてどのように考えているか？

②描き方について。応挙の波濤図は、狩野派の「波」の描き方に近い。描き方の伝統的な規範を出ていないが、実にリアル。襖絵と比較すると波濤図は、上の方に行くほど遠くなる東洋の三遠法に近い。「波上白骨坐禅図」は、西洋の遠近法を意識した立体的な描き方になっており、そのことが逆にガイコツのリアルさを強調しているように見える。応挙は、描こうと思えば立体的に描けたにも関わらず、波濤図のような伝統的な描き方をしているのはなぜか？ おだやかな波の表現は“永遠性”を表しているように思えるが、どうか？

③描かれている内容と主題について。応挙の「波上白骨坐禅図」は完全形のようなのだが、よく見ると歯が欠けており、少し口を開けて笑っているような表情をしている。話が飛躍するが、出光美術館所蔵の「蛙画賛」（坐禅して人が仏になるなら、カエルはとくに悟りを開いている。禅僧に対するからかうようなほほえましい笑いがあり、坐禅の形式ばかりにこだわらず、目覚めよと諭す）と比較すると、応挙の骸骨絵は、骸骨自体をリアルに描

こうしている感じがする。偉い人に依頼されて描いたようにも思える。また、江戸時代によく描かれた「野ざらし仏」では、女性の体が朽ち果てて土に還るという、仏教的な無常観に基づいた教えが描かれている。室町時代の九相図にも野ざらしになった骸骨がよく描かれており、当時の日本人が骸骨を目にしなかったはずはない。野ざらしは日本の絵画の主題として非常に好まれた。これらに描かれた骸骨図と、応挙が表現しようとした「真実」とどう違うのか？ 医学的な精密さというより、生きている禅僧の骨が描かれており、骸骨を生きているように描くことを迫及しているように見える。応挙の絵には、西洋でいう正確に写す「写生」ではなく、モノの気を写す、中国でいう「真」、つまり、「真実」を描こうという精神が入ってきている。応挙は西洋と中国のどちらに近いと考えられるか？

スクリーチ先生のお話で面白かったのは、日本人は西洋の文字が読めなかったので、絵だけを読み取っており、ヴェサリウスのキリスト教精神を理解していないことから様々な誤解や間違いが起こっているという指摘である。このような問題は、いま出光美術館で開催している「陶磁の東西交流展」にもたくさん事例がある。東洋と西洋の交流において、写される際に内容を理解していないことによるかわいい誤解は興味深い。

(文責 北原・高野)



最後に討議が行われ、スクリーチ氏からは、ビジュアル・カルチャーは、美術品だけでなく、地図や科学書の挿絵など、いろいろな資料を含めて幅広く研究した方が良いが、注意しなければならないのは、絵画資料はそれを制作した人によってそれぞれ意味が異なるという点があること。池大雅のような芸術家を研究対象にする際は、単に骸骨を写したのではないことに注意する必要がある。スクリーチ氏にとって、歴史学者が美術品を扱うようになるのは大変好ましいこととされた。

また、丁寧なコメントをされた出光氏からは、美術作品を取り上げる研究が近年さかんになっているという指摘がなされた。受容史、つまり作品を現在の解釈ではなく、当時の人々がどう見ていたかを、美術史の狭い枠組

みにとどまらず、当時の詩など文字的な側面からも研究していく必要がある。美術史は作品からはじまって、結局、作品に戻る傾向が強い。一つの歴史のなかに位置づける必要がある池大雅の諸作品を作品の中で完結してしまいがちだが、作品が歴史につながっていない。この点は美術作品を扱う場合、気をつけなければならないとの指摘がなされた。

なお、この企画は非文字資料研究センター研究員のクリスチャン・ラットクリフ（外国語学部国際文化交流学科）と北原糸子（歴史民俗資料学研究科）が担当、実施した。



取り間違えられた火山噴火図

—— オランダ商館長が紹介した 1783 年天明浅間山噴火絵図 ——

北原 糸子（非文字資料研究センター 研究員）

夏休みを利用して今年イギリス、オランダに行った。目的は災害資料の調査であったが、日本災害絵図の研究をしているロンドン大学大学院生の案内でイギリスでは所定の成果を収めることができた。オランダは以前にシーボルトの資料調査のため、ライデン大学に行ったことがあったので、ハーグのオランダ国立公文書館は始めてであったが、外国からの閲覧者に対しても開かれた対応がなされていて、難なく資料を探し当てることができた。ここで調査してきた絵図を紹介したい。

調査した絵図はオランダ国立公文書館所蔵にかかる天明浅間噴火の絵図である。この絵については、論文「ティツィング『日本風俗図誌』（1822）掲載の二点の火山噴火図について」（『歴史民俗資料学研究』13号、2008年3月）を公表した。しかし、論文執筆段階では原画を見ていたわけではなかったので、今回は原画をみる目的でオランダに出かけたというわけである。

間違って掲載された噴火図

なぜ原図をみるが必要になったのかというと、ティツィング（Isaac Titsingh 1745～1812）の死後、*Illustrations of Japan*（R. Ackermann, London, 1822）に間違った解説が施され、その間違いが正されることなく、沼田次郎訳『ティツィング日本風俗図誌』（雄松堂出版、1960年）にも踏襲されているからである。間違いだという指摘はすでに松井洋子氏が行っていた（「ティツィングの伝えようとした『日本』」横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本』〈吉川弘文館、2005年〉）。

どのような間違いかというと、掲載されている2点の噴火図は両方とも1783年浅間山天明噴火を描いたものであるにもかかわらず、1点は確かに浅間山天明噴火を描くものと正しく解説されているが、もう1点は10年後の1792年に噴火した雲仙普賢岳の噴火図と解説されているからである。

1783年浅間山天明噴火図についても、1792年雲仙普

賢岳噴火図についても少なからずの絵図が残されており、その多くを見てきた者として、当初はこの間違いに気付かず、新しい雲仙噴火図が出てきたのかと期待もし、また、大いに惑わされた。どうみても、雲仙普賢岳の噴火を描いたものとは思えないものが普賢岳噴火図とされていたからである。気付いてみれば、2点とも浅間山天明噴火を描く図であるにもかかわらず、そのうちの1点が雲仙普賢岳噴火図と解説されているのだから、おかしいと思うのは至極当然なことなのであったのだ（図版1、2）。

ティツィングは1779年以来3回来日し、丁度第2回の来日中に天明3年（1783）浅間山噴火が起きている。噴火当時その情報を得たか否かは不明だが、翌天明4年にも来日、通算3年8ヶ月の日本滞在であった。この間に日本に魅せられた研究の成果が『日本風俗図誌』である。4年に満たないほどの滞在であったが、その後も長崎の日本通詞たちとの書簡による交流を通じて情報を得、着々と日本研究の実を挙げていたという。

『日本風俗図誌』中に口絵と本文に解説の付されたこれら2件の噴火については、いずれにしても、見聞記録などからの2次資料に基づいた記述であるから、そうした誤りも起こりうるだろう。

浅間山天明噴火の北麓と南麓の被害

しかし、どうしてそういう間違いが起きたのかということには多少やむを得ない事情が別にあると推定されるのである。というのは、天明浅間山噴火の様相に関わる問題がある。

天明浅間山噴火は周知のごとく天明3年7月初旬大噴火を起こし、北の山麓にあった鎌原村を火砕流が襲い、村人500人ほどを一気に呑み込むという悲劇が起きた。そればかりではない。火山泥流が吾妻川に流れ込み、流域村々の田畑や家を押し流し、利根川へ流れ込んだ。この災害では1500人もの人が犠牲になった。浅間山北麓



図版 1



図版 1 浅間山噴火図〈南麓〉
東京大学史料編纂所蔵

図版 2



図版 2 雲仙噴火図（実は浅間山噴火図北麓）
東京大学史料編纂所蔵

は火山泥流による被害で大きな打撃を受けたが、南麓の中仙道周辺村々は降灰量が大きかったものの、軽井沢宿では火山弾による火災が起き、若い人が犠牲になったこと以外は北麓のような大被害とはならなかった。当時の絵図にも北麓と南麓の違いはくっきりと描かれている。したがって、事情を知らない人からみれば、同じ山の噴火図とは思えない図となる可能性が十分にあったわけで

ある（図版3、4）。

そのうえ、ティツィングの生前にはこの著作は公刊されるまでに至らず、松井氏によれば、フランス語から英訳を試みたレミユザという人物によって10年を隔てて発生した浅間山と雲仙普賢岳噴火の解説図についての取り違いが生じたとされている。



火の絵図を遠くバタビヤにいたティツィングはそもそも入手していなかったのかもしれない。

つまり、ティツィングではなく、フランス語から英訳した人物は、2点の全く様相の異なる噴火図をみて、それぞれ異なる噴火の絵図と考えたのではないだろうか。彼編集者は、2点の噴火図がそれぞれ本文に解説されている浅間山噴火と雲仙岳噴火にあたると考えて、口絵に載せたと推定される。日本文字の読めない人にはいくら解説がかかれていても、それを読み取ることは不可能だからである。

オランダ国立公文書館が所蔵するティツィングの手稿のなかに挟まれていた原図をみると、「信州上州両国村数凡九拾余ヵ所焼亡流失並土下死亡不可測」と書かれ、山、川、村、城郭などの日本字の説明があちこちに付けられているのであるから、多少は日本文字を解したティツィング自らが編集したのであれば、間違いは生じなかったであろう（図版5）。

こういう次第で、わたしはこの原図の多数の日本文字をみて、漸く間違いの筋道が納得できたのである。

それにしても、噴火図はティツィングが得た当時のものよりかなりの程度に誇張が施された絵図となって口絵に登場した。この作為が原作者か翻訳者かどちらによって成されたのかは今のところ、わたしには分からない。しかし、図1の誇張された噴煙、図2の山々全体が噴火したように色づけされた様相は、ある種の噴火の既成概念が刷り込まれていることは疑いない。この絵は日本から外国へ渡り、編集のためとはいえ、写し回されたものとしてよいとすれば、この間に実態よりもさらに大災害として印象付けられる絵柄に塗り替えられていったものと推定できる。

しかしながら、こうした傾向は災害メディアに関しては時代や地域を超えて存在するといえるのではないだろうか。

図版 5



図版 5 ティツィングの手稿のなかにあった浅間山噴火図 オランダ国立公文書館蔵



史料としての写真絵葉書

田中 傑（芝浦工業大学 PD 研究員／非文字資料研究センター 研究員）

1 速報するメディア

ここに『明治四十二年十一月一日 故伊藤博文霊柩虎ノ門通過ノ光景』と題された写真絵葉書がある（写真1）。写真は現在の文部科学省前（虎ノ門）の交差点から北北西の方角、ちょうど、現在の農林水産省庁舎（当時、海軍省庁舎）と東京高等・地方裁判所庁舎（当時、大審院庁舎）にむかって撮影されている。消印は撮影から3日後の「青山11月4日」である。

そして文面はこうなっている（写真2）（以下、判読不明箇所は*印を付す。また、読者の理解のため、句読点や単語をカッコつきで補う）。

「嗚呼、国家の元勳、世界の偉人逝けり（。）愈々明日は国葬式を弔ふ。学校は休みだから日比谷で不肖生も弔ふ積りだ（。）本日は青山練兵場で天下晴れの好日を利用して五十八誕生祝の観兵式は荘厳に且つ厳肅に挙行された（。）然し、ただ本年の観兵式は軍人は勿論文武百官胸中一の悲哀を含有して此の式に臨む日々（。）何ぞ図によりて判ぜられよ、図は是れ霊柩が新橋着後、霊南坂の官舎に至る光景なり（。）過日御尋ねの学院入学

の俄に**出来ると思ひますが若し志望なら聞いて上げましやろか。御国は余程寒くなつたさうで、我が東都是本日なんか、単衣と袷で尚暑い位だつたよ、アー珍客なる余が従弟が訪問して来る、これで失敬。」

この文面は現代のわれわれに対し、写真絵葉書による情報伝達の（意外な）速報性を伝えている。すなわち、この発信者がこの文面を11月3日の天長節（天皇誕生日）に認めるためには、11月1日の正午以降（撮影された建物やひとびとの影の角度から、南中以降と判断）に撮影された写真が絵葉書となって3日の時点で市中に出回っていなければならないからである。



写真1 「明治四十二年十一月一日 故伊藤博文霊柩虎ノ門通過ノ光景」



写真2 宛名面



2 参加する「メディア」

先ほどの写真絵葉書を発信した人物が、絵葉書に写された伊藤博文の葬列を実際には見送ったか否かは明記されていない。そのため、発信者も受信者も共に伊藤の葬列を写真絵葉書というメディアを通じてのみ認識していて、両者の違いが単に「事件現場の近くにいたかどうか」に過ぎなかった可能性もある。

一方、次に示す『大正三年二月十日国民大会 警官群衆ヲ防止ス』という写真絵葉書（写真3）は、いわゆるジメンス事件に際してなされた内閣弾劾決議案（当時の内閣首班は海軍大将、山本権兵衛）の否決に激昂した群衆が議会になだれ込もうとして警官に制止されている様子を写したもので、そこに記された文面によれば、発信者は事件現場に直接立ち会っている（写真4）。

「当日学校よりの帰り猛烈なる志士の演舌***午後一時頃比日谷（ママ）に立寄り政府の横暴圧迫に憤激せる国民は日比谷国民大会に参加しそれより雪崩を打って議会前にと押し寄せ折角の警戒線は忽ち破られ益々群衆四方より集り見る見る議会前は左右から海軍省より（日比谷公園）西幸門付近にかけて充満***雑沓を極め（、）早朝より押し掛けし群衆は、パン、煎餅を口に入らし公園鉄柵上よりヤレヤレの声（、）号外屋は必死となりてチリンチリン 暫くして君子を気取りて泰然と***楼へと引きあげた 敬白」

この文面には、絵葉書の写真が撮影された当日、政府と海軍の腐敗を糾弾する群衆が国民大会の会場であった日比谷公園から警戒線を突破して汚職の現場となった海

軍省（現、農林水産省庁舎の位置）、そして弾劾決議案を否決した帝国議会（現、経済産業省庁舎の位置）にかけての一带に結集し、汚職糾弾の意思表示をおこなった様子が一参加者の視点から描かれている。また、「暫くして…」という行では、この暴動事件が日常生活と隣り合わせに生じていたことも感じさせる。

もっとも、本絵葉書に記された情報そのものは受信者に達した時点では既に鮮度が低く、消印（「牛込2月18日」）は事件の8日後となっている。絵葉書の発行が遅れたためか、発信者が文面を認めるのが遅れたためか、それとも、単に投函し忘れたためか。受信者は当時、群馬県高崎市の歩兵第十五連隊に入営中の「カゴの鳥」であったが、それも旧聞が新聞なみの新鮮さを保持する理由にはならない。これはおそらく、一凡人である発信者が半分興味本位で現場に居合わせ、事件後も（警察のお世話になることもなく）平生と同じように時間を過ごせたという傍観者の状況にあったため、自らの見聞した事実をタイムラグなく伝える意志を欠いていたからではないだろうか。

写真3



写真3 「大正三年二月十日国民大会 警官群衆ヲ防止ス」

写真4



写真4 宛名面

3 写真絵葉書とeメール

ここで、写真絵葉書というメディアによって「情報（写真情報）」が伝達されていったプロセスを、「制作者（発行者）」、「発行者」、「受信者」の3者に分けて模式化して捉えてみたい（図1）。これによって写真絵葉書というものの性格、役割を明らかにしようと思うのである。

一般的な写真絵葉書は制作者が取材を通じて写真絵葉書の題材をメディア化し、そのメディア化された情報をまず発行者が入手（購入）し、次いで受信者に対して発信（郵送）する流れを辿る（図1中、「1」）。そこでは、発行者と受信者はともに写真絵葉書によって伝達された情報に対して「受け手」であり、両者の違いは情報に接した順番の前後だけにある。先に触れた伊藤の葬列写真葉書はこれに該当する。

このような発行者と受信者の関係は、日比谷の暴動の写真絵葉書においてはやや異なり、発行者は題材の現場に立ち会っていた。この場合、不特定多数にむけて大量に発行された写真絵葉書というメディアは、事件に直接参加した特定少数の人物にとっては自らの行動を記録・宣伝する媒体となっている（図1中、「2」）。もっとも、学校帰りに日比谷の暴動に参加した発行者は、暴動という題材を自らメディア化して伝達する能力をもっていなかったから、ここでいう「記録・宣伝」は制作者にとっての「記録・宣伝」とは質的に異なる。このように考えてみると、橋爪（2006）¹¹は『画像入りの私信』という一点において「写真絵葉書が「最新のeメール」と繋がっているかもしれないと述べるが、当時の写真絵葉書による情報の伝達過程においては、今日のわれわれがeメールの送信に際して享受する条件（制作者と発行者が一致する）（図1中、「3」）はごく一部でしか成立していなかったといえよう。

4 写真絵葉書の類型と資料的価値

次に、写真絵葉書をその題材に着目して類型化してみたい。わたしの経験では、写真絵葉書には以下のような

写真5 「（東京名所）靖国神社向大村銅像 The Bronze-Statue of Late Omura, Kudan, Tokyo.」

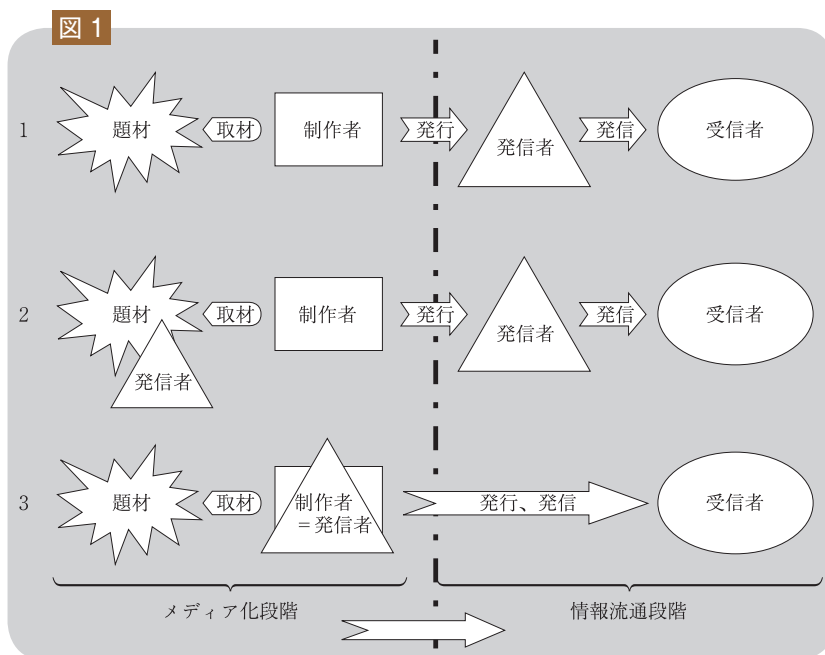


図1 写真絵葉書による情報伝達のプロセス

4つのタイプが存在すると考えられる。1つ目は「名勝や典型的風景、建築物」などが題材となっているタイプ（名所絵葉書）（写真5『（東京名所）靖国神社向大村銅像 The Bronze-Statue of Late Omura, Kudan, Tokyo.』）、2つ目は「祭りや習俗、日常風景」などを伝えるタイプ（風俗絵葉書）（写真6『（玉川名所）漁婦』）、3つ目は「事件や事故」などを伝えるタイプ（ニュース絵葉書）（写真1、写真3、前掲）、4つ目は「官公署、学校、商店の新築（開業）や事業内容、イベント開催」などを伝えるタイプ（宣伝絵葉書）（写真7、『東京市新橋駅前親切丁寧勉強 丸屋旅館』）である。

これまでに紹介した2枚（写真1、写真3）はこれら

写真5





写真 6



写真 6 「(玉川名所) 漁帰」

4つのタイプのうち3つ目の「ニュース絵葉書」に該当する。また、先述した「制作者と発信者が一致するケース」は基本的には4つ目の「宣伝絵葉書」においてのみ観察される。

平時においてはマーケットが最も大きかった（その写真絵葉書を通じて情報を入手し、それを発信することによってそこに焼き付けられた情報をリレーしようと考えた人物が多い）のは名所絵葉書で、以下、風俗絵葉書、ニュース絵葉書（この種の題材は反復する性質にはないし、大量に印刷してもすぐに陳腐化するため、風俗絵葉書よりマーケットが小さいと考えられる）、宣伝絵葉書という順番で発行枚数が少なくなる。逆にこれら絵葉書を後世の我々の興味に即してその記録性、希少性に着目して順序をつけるならば、最も価値があるのはニュース絵葉書あるいは宣伝絵葉書であり、これらに次いで風俗絵葉書、そして最後が名所絵葉書ということになる。

5 都市史研究への利用可能性

最後に、わたしの専門である都市史の分野における写真絵葉書の利用可能性について言及したい。

写真 7



写真 7 「東京市新橋駅前 親切町唸強 丸屋旅館」

わたしと同様に都市史を専門とする橋爪（2006）は、写真絵葉書の重要性を「設計図が遺されていない市井の店舗建築の様子を伝える史料」⁽²⁾である点に見いだした。わたしの場合は、近代以降の建築・都市計画法規が橋爪のいう「市井の店舗建築」にどのような影響を与えながら運用されたのかに関心があるため、市街地の空間を面的に撮影した写真絵葉書を定点観測的に観察することが多くなる。

その際、「建築物は小さなものから大きなものへ、木造などの軟らかいものから鉄筋コンクリートなどの硬いものへと建て変わっていく」という仮定を置いている。また、法規の施行が市街地の空間実態に与えた影響について考察するために写真絵葉書の撮影年月を特定する必要があるが、写真絵葉書の多くには撮影年月が記載されていない。そのかわり、撮影場所はだいたい明記されている（誤記の場合もあるが）から、その場所において過去から現在にかけ一度は存在した人工構造物のうち、例えば道路基盤や大規模な建築物など各種の記録（土木関係の事業誌、建築関係の雑誌など）が存在するものが写り込んでいるか否かを手がかりに、撮影時点がそれらの

着工あるいは竣工の前か後かを比定するのである。

少しだけ例を示す。写真8と写真9は関東大震災後の京橋付近を撮影したものである。写真8では見渡す限りの焼け野原が、写真9では簡易な構造の仮設建築物（バラック）がいままさに建てられつつある様子が、それぞれ写っている。写真8において2階建て（図中、a）、3階建て（図中、b）、平屋建て（図中、c）の3つの構造物の焼け残りをマルで囲んでいるが、これらは写真9の時点でそのまま残っていたもの（a'）、撤去されたもの（b'）、新しい屋根を掛けられて再利用されたもの（c'）と三者三様の運命を辿った。写真9を一瞥しただけでは復興のまちなみにバラックの真っ白い切り妻屋根が増えたことばかりが目立つが、写真8と比較することにより、新築されたバラックに対しての「地」ともいえる焼け残りの構造物が被害の程度や所有者・占有者の思惑の如何によってそれぞれどのように扱われたのかが明らかになるのである。

6 おわりに

以上、本稿は「史料としての写真絵葉書」を取りあげ、そのメディアとしての性格、写真の題材に着目した類型、研究に際しての有用性と利用方法を簡単に述べた。

宮武（1923）⁽³⁾は「従来の写真絵葉書は大概コロタイプ（硝子版）であつて、アートタイプ（銅版）の粗製物は絶無であつたが、今回（引用注、関東大震災）は数多く製造を急いだので、百中の九十九までは皆銅版であつた」という。今日の辞書ではコロタイプとアートタイプは同義語とされており、この言葉を文面のまま受け取ることにはできないが、震災を挟んで写真絵葉書の画質が著しく低下したことはわたし自身のこれまでの収集経験から強く感じる。明治・大正期のコロタイプ印刷による写真絵葉書では画像を拡大すれば様々な情報（看板の文字、通行人の服装など）が浮かび上がって来るのだが、昭和に入ったあたりから増え始めた網点印刷による写真絵葉書では画像をいくら拡大してもそこに浮かび上がるのは

写真8



写真9



「点」だけである。

この点を考えると、資料的に有用な写真絵葉書は昭和以前に発行されたものに限定されてくる。コロタイプという原始的で実直な表現が、網点という視覚科学的な代用表現に置き換わった頃、この世の中が機能主義・効率主義へと急速に傾きはじめ、街角からは個性（地方性）が失われ、画像の細部の拡大が不能であると同時に不必要になっていったのは非常に象徴的なことであると感じる。

(1) 橋爪紳也（2006）、『絵はがき100年 近代日本のビジュアル・メディア』、朝日新聞社、p.5。
 (2) 橋爪（2006）前掲書、p.6。
 (3) 宮武外骨編（1923）、『震災画報第二冊』、半狂堂、p.37。
 本稿に用いた写真絵葉書はいずれも著者が架蔵するものである。



只見町の“知恵”を発信するために

—作業工程表から見る自然と暮らし—

小松 大介（非文字資料研究センター 研究協力者）

福島県南会津郡只見町は、福島県の北西部に位置し、新潟県に隣接している。只見町は、北部の只見地区と中部の朝日地区、そして南部の明和地区が、昭和34年に合併してできた町である。各地区で育まれてきた民俗や方言が存在しており、隣接している地区でありながらも少なからず異なる民俗を見ることができる。また、非常に雪深い地域で、その積雪量は2メートルを超えることもある。かつては、新潟県魚沼市と東西に結ぶ六十里越えと呼ばれる道と新潟県三条市と南北に結ぶ八十里越えと呼ばれる道しかなかったため、冬季は雪で閉ざされることになる。しかしながらも、人々の営みは絶えず行われており、これらの雪に対処するための雪下ろしなどの除雪や、雪を利用しての作物の保存、冬季間に行われる伐採や狩猟など、独特な民俗を形成する一助となっている。そうした日々の営みの中で使用される道具である民具においては多種多様な資料を見ることができる。只見町では昭和40年代後半より民具の収集を始め、現在では5000点以上の民具が収集されている。只見町で行われてきた民具整理は、民具を直接使用した人たちが整理作業を行うという独特な整理スタイルを確立し、一般的に“只見町方式”という呼び方で、これから民具整理を行う自治体の注目を浴びてきた。2005年には、生業に関わる民具を中心とした「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」という形で、2333点の民具が国指定重要文化財に指定されている。

昨年度で終了した神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」において、地域統合情報発信班は、福島県南会津郡只見町を舞台とし、これらの豊富な資料を利用してインターネット上で、民俗・文化などの情報発信を行う「只見町インターネット・エコミュージアム」の開発を行った。この「只見町インターネット・エコミュージアム」では、只見町の景観・民俗事象・民俗映像・民具を複合的に組み

合わせることで、研究者は勿論のこと、只見町を知らない一般の人々、そして、只見町内の人々にもこれまで知られていなかった只見町を知ってもらうことを目的としている。「只見町インターネット・エコミュージアム」では、四つの部門を設けている。

一つ目は「只見町の俯瞰写真」で、小林地区・梁取地区の俯瞰写真から、地区内にある儀礼や史跡等をクローズアップし、文章と映像でそれらの概略を知ることができる。例えば、小林集落・梁取集落でそれぞれ小正月に行われる早乙女踊りの映像を見ることができ、隣接集落でありながらも差異があることを確認することができる。また、只見町に伝わる昔話も映像で見ることができ、インターネット上でありながらも、その場に居合わせているような雰囲気を楽しむことができる。

二つ目は「只見町の屋根葺職人」である。ここでは只見町で行われている生業の一つである屋根葺職人に焦点をあて、仕事の内容から儀礼まで民具とともに説明している。この部門は博物館でいうところの企画展示であり、「只見町の俯瞰写真」では概略的な説明であったが、一つの事柄に焦点をあて詳細な解説を交えて説明している。今後は新しいコンテンツを追加していくことで只見町をより深く理解することができるようになる。

三つ目は「只見町所蔵民具検索」で、先述の「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」として国指定重要文化財に指定された2333点の民具を検索することができる。検索方法は、民具名、キーワード、用途分類、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」で分類されている各作業分類によって検索することができる。得られた検索結果からその民具の民具整理カードを閲覧することができる。また、一部の民具では、高精細画像を閲覧することができるようになっており、その民具の使用痕まで詳しく見ることができる。

四つ目は「自然と暮らし」である。ここでは「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の資料の選定時に、



只見町インターネット・エコミュージアム
(<http://www.himoji.jp/tadami-item/index.html>)

作業ごとに記入された作業工程表をもとに只見町で行われていた生業の四季サイクルを紹介するものである。この「自然と暮らし」は今年度の開発を行う部門である。

今年度を開発を行っている「自然と暮らし」部門について詳しく見ていこう。本部門では先述の通り「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の資料の選定時に作成された作業工程表(図1)が基本となっている。この作業工程表は地元の方々が手書きで記入したもので、実際の経験に基づいているだけあって、研究者が気づかないような細かな点が記入されている。これらの内容は、先代、先々代から脈々と受け継がれてきたものであったり、記入者が経験から新たに獲得した知識であったり、学校や書籍からでは学ぶことができない只見町ならではの“知恵”が含まれている。また、中には、その作業で使用する民具や作業の様子が図示されているものもある(図2)。そして、大きな特徴として、それぞれの作業における作業者のつらかったり楽しかったりといった思い出も書き記されており、経験者でないとわからない作業の実態が記入されている。この貴重な資料を「只見町インターネット・エコミュージアム」上で活かしたいと考え、本部門の開発に繋がっている。いかにわかりやすく

インターネット上で展開させるか、また、研究者も一般閲覧者も満足していただけるようなシステムを開発することがカギとなる。本部門では「春」「夏」「秋」「冬」のそれぞれのページを用意し、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」で作成された作業と自然との関わりを示す絵の上に、それぞれの季節で行われる作業分類であるゼンマイ採り・稲作・畑作・焼畑・狩猟・漁撈・山樵・麻糸製造・マタタビ細工・屋根葺を矢印にして示した。そして、それぞれの矢印を選択することによって、さらに細かな作業を見ることができる。細かな作業を選択すると、それに関する資料として作業工程表に記入されている説明、只見町がこれまで撮影してきた写真、COEで撮影してきた作業の様子を映した動画、作業で使われる主要民具を見る

ことができる。主要民具は、「只見町所蔵民具検索」と連動することで幅広く民具を見ることができるようになっている。

この主要民具は作業工程表に記入されている民具を抽出したが、大きな問題が残されている。その大きな問題とは民具名の問題である。只見町は只見地区・朝日地区・明和地区から成り立っている。このことが只見町に多種多様な民俗が残されている一因となっていることは先述の通りであるが、民具名においても同一の民具に対して複数の民具名が使われている。例えば、泥状の田を平らにならすために使用する木製の熊手のような民具があるが、只見地区では「エブリ」または「エンブリ」と呼び、明和地区では「手代棒(テジロボウ)」と呼ばれている。また、収穫した豆類を叩いて落とすために使用する二又の木製の棒があるが、朝日地区では「マメオトシ」と呼び、明和地区では「マトオリ」と呼ばれている。この「マメオトシ」はシナの木皮を繊維にして縋りかけたものを絡めとるときにも使用され、この時は「ヨッツォカラミ」または、「ヨッツォヨリ」へと名を変える。多種多様な民俗を示す好例とも言えるが、インターネット上で提示する際には、逆に閲覧者に対して混乱を与えかねない。「只見町所蔵民具検索」では、一つの民

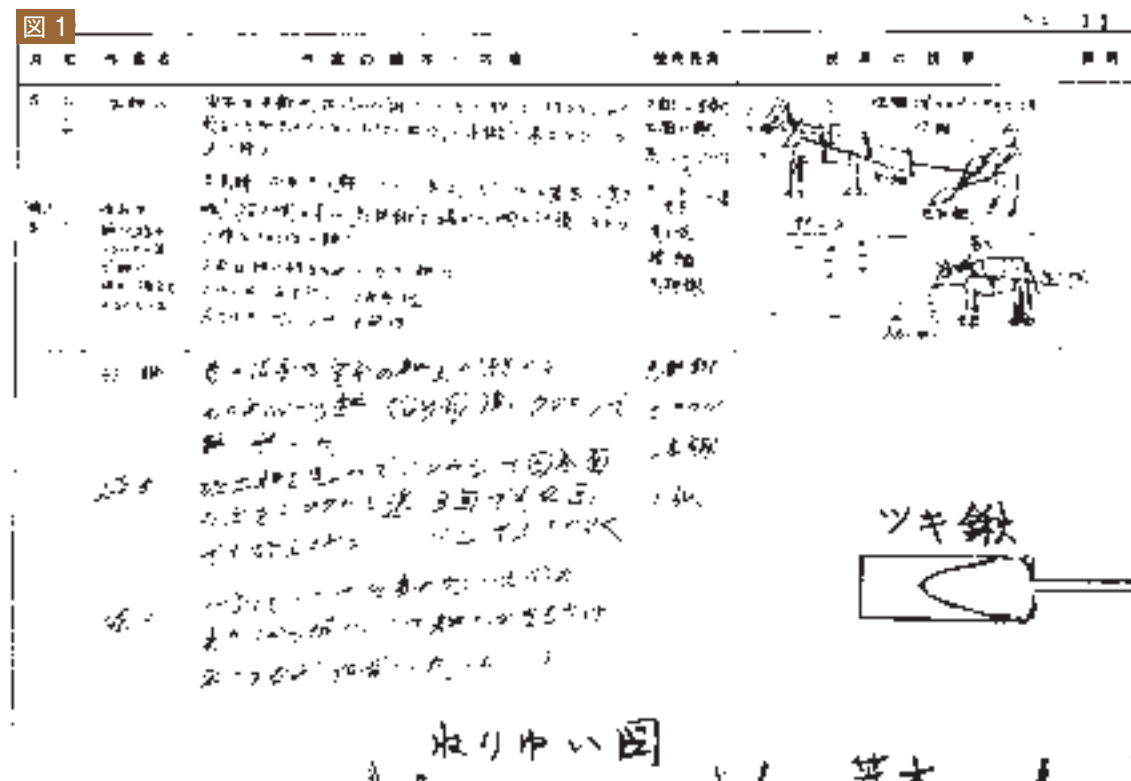


図2

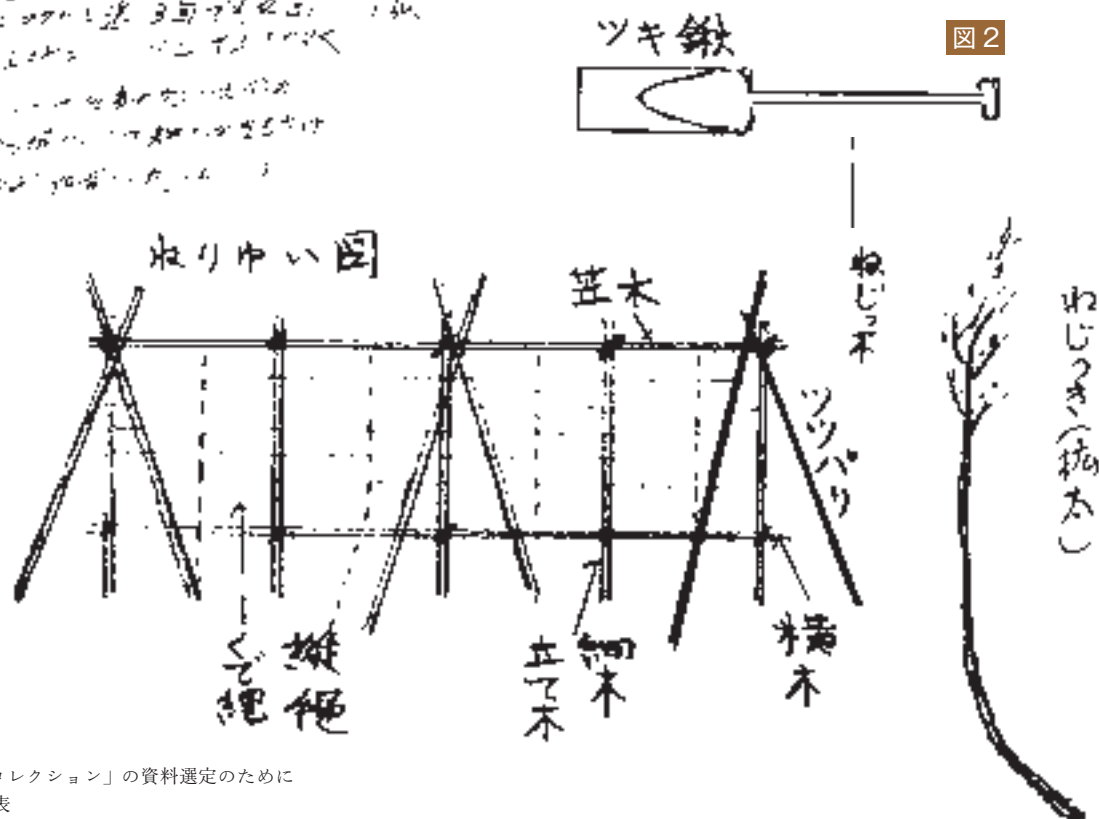


図1 図2

「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の資料選定のために
地元の方々が作成した作業工程表

具名で検索をかけた場合、同一の民具であれば違う民具名であっても全て検索結果として表示させているが、「自然と暮らし」では全ての民具名を同一であると示すには煩雑になりすぎて困難である。現在のところ、それぞれの作業の説明の中で提示したり、「只見町所蔵民具検索」と連動することで対応させているが、民具名から見る事ができる只見町の民俗の多様性を欠落させてしまう恐れがある。今後の課題の一つである。

「只見町インターネット・エコミュージアム」は、「自然と暮らし」の完成により、当初、予定していた計画を

全うすることになる。しかし、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」以外の民具の「只見町所蔵民具検索」への登録や「只見町の屋根葺職人」のような企画展示の拡充、そして、閲覧者の反応からの更新など、多くの作業が残されている。5年後、10年後と開発を進めた上でどのようなインターネット・エコミュージアムになっているだろうか。誰もが使いやすく、そして理解しやすいインターネット・エコミュージアムにしていかなければならない。



演説をいかに読み解くか？

——近代日本における演説の受容と雄弁家をめぐって——

高野 宏康（非文字資料研究センター 研究協力者）

はじめに

いま、「演説」が再び注目されつつあるようである。米国大統領選挙が空前の盛り上がりを見せた理由のひとつに、演説の魅力が大きかったことは誰もが認めるところであろう。日本でもCD付きの演説集が次々に発売され、ベストセラーになるほどである。一方、日本では魅力的な演説をする政治家は少ないが、政治家の語り口に関心が集まり、大衆にわかりやすく表現できる政治家が良くも悪くも人気を集め、政局を左右するようになって久しい。政治理念の表現の仕方、伝達の過程に関心が向けられているということなのだろう。演説はその点に密接に関わるメディアなのである。しかし、これまで演説はレトリック学やコミュニケーション論などで研究されることが多く、演説から歴史や社会を読み解く研究は明治期の自由民権運動との関連以外ではほとんどなかった。

筆者は、戦前の政治家で演説の第一人者とされる、永井柳太郎の研究に取り組むうちに戦前の社会における演説の果たした役割の重要性を痛感するようになり、演説を歴史学的に分析する方法を模索してきた。永井は、学生時代に演説大会で大隈重信の知遇を得て、金沢で行った応援演説が注目されたことが政治家となる契機となった。議会では初当選後の「原敬批判演説」をはじめ、デモクラシーの旗手として長く語り継がれた名演説を多数行い、演説会では大衆に熱狂的な人気を誇った。著作は初期の学術書以外はほとんど演説・講演集である。つまり、永井は演説のちからによって社会的・政治的地位を獲得していったのであり、戦前の日本はそのような「演説による立身」が可能な時代だったことがわかる。しかし、そのことは一方で、戦時期には演説による戦争賛美へと永

井を向かわせた。戦後、演説が衰退するとともに永井も忘れられていったが、永井の「転向」には、演説というメディア形式の問題が深く関係していると思われるのである。

本稿は、これまでの知見をまとめ、非文字資料の一つとしての演説の特徴と分析方法について、ささやかな叩き台を提示してみようという試みである。

政治文化としての演説の特徴

まず、演説そのものの特徴について説明しておきたい。演説は基本的に「言葉で自分の考えを多数の人々に伝達する行為」と言え、広義には、落語などの口承芸能も含まれるし、宗教の伝道における説法なども演説ということになる。日本の場合、近代以降に西欧からもたらされた政治文化の一つとしての演説をいかに日本社会に則した形で取り入れるかが大きな問題となった。

明治初期に演説の日本への導入に尽力した福澤諭吉は、近代社会においては政治から日常生活に至るまで、人々は相互の意思を言葉で表現し、合意を形成していくことが要求されるため、それに対応する方法として演説の必要性を主張した。つまり、演説は福澤が理想とする近代社会を生きる自立した個人にとって必須のメディアとされたのである。演説の重要性を理解した人々は、熱心に演説会で自ら演説を実践し、他者の演説を聴いた。1875年には福澤が印税を投入して建設した三田演説館が開館し、馬場辰猪らの北辰社も演説会を開催した。1880年頃には、全国各地で演説会がさかんに開催されるようになっている。

演説の特徴として重要なのは、まず、主張内容を声と身振りで表現することである。当然ながら、



演説内容は議会政治論などの西欧思想が中心であり、声の出し方も身振りも日本の前近代社会で定型化した身体技法とは著しく異なっていた。そのため、演説の方法や技法について書かれた演説論や指南書が多数出版された。最初の本格的な演説論である、尾崎行雄訳述『公開演説法』（1877年）では、演説方法を15条に分類し、音声・身振り・服装など演説に関するさまざまな技法を図解入りで体系的に解説している。初期の演説論は音声や身振りについての技術論を重視していることが特徴で、当時の人々の関心が、これまで日本には存在しなかった声の出し方と身振りのあり方にあったことがうかがえる。

また重要なのは、演説は、行われた際のさまざまな要素によって規定される一回性のものだということである。すなわち、演説が行われた時期や文脈といった時間性、場所（地域、中央／地方など）・会場（屋外／屋内、街頭、広場、公園など）といった空間性、そして演説者（性格、年齢、性別、表情、身振り、演説人数、登場順など）・聴衆（階層、性別、年齢、人数など）、演説内容（政治論、外交論、文化論など）・形式（演説、講演、討論など）によって規定されるのである。また、演説内容についても、表現の誇張や省略、言い間違いなどが頻繁に起こる一方、レトリックや修辞、例え話が増えられることで、説得力が増減することもある。

いずれにせよ、政治思想としての純粋さを演説に期待することはできない。つまり、演説を分析する際には、演説者の主張（理念、政治思想など）がどのように表現され、聴衆に受容・理解（もしくは誤解）されていったかの過程の総体に着目することが必要となるのである。そのような観点から、論じる内容（普通選挙論など）を聴衆に説明する論理展開やレトリック、拍手や野次といった反応、演説後の評価を分析することで、当時の社会の心性や価値観、すなわち社会史的な問題を明らかにしていくことが可能となると言えよう。デモクラシー思想の純粋さでは吉野作造らに及ばない永井柳太郎は、演説という表現形式に着目しなければ、その活動の意義が充分理解できな

いのである。

演説についてのさまざまな資料

演説がさまざまな要素に規定される一回性のものであるということは、演説を完全にそのまま再現することは不可能であるということの意味する。しかし、演説は、書籍や雑誌、レコードといったメディアで記録（表象）されているため、適切に資料批判を行うことでさまざまな情報を得ることができるのである。演説が記録された資料としては、書籍（演説集、演説論）、演説や演説評が掲載された雑誌や新聞記事、演説レコード、手書きの演説草稿、映像資料などが挙げられる。これらは、文字資料としての性格と非文字資料としての性格をそれぞれ別に持つ場合と、書籍のように、文章（文字資料）と挿絵・写真・図版（非文字資料）が融合している場合があるので、その点が分析の際のポイントとなる。以下、いくつか具体的な資料を取り上げて説明してみたい。

演説論は、尾崎行雄訳述『公開演説法』（1877年）の後、多数刊行されたが、当初は発音と身振りを重視した構成のものが多く、西欧の演説技法をそのまま紹介した「直輸入」的な内容となっているのが特徴である。そのような状況は、馬場辰猪『雄弁法』（1885年）刊行後に転機を迎える。同書は、洋書の翻訳・翻案にとどまらず、自分の経験や日本の演説の事情をふまえ、詳細に説明している。興味深いのは、技術論の必要性を主張しつつも、「熱心」すなわち精神性の重要さを強調していることである。以後、昭和期に至るまで、技術論と精神論のバランスは繰り返し問題にされる論点となる。

演説集も、欧米の著名な演説を収録したものから、次第に日本の雄弁家の演説を集めたものが多くなり、多数の読者を獲得した。大正期から昭和初期にかけて、大日本雄弁会講談社から刊行された『大演説集』シリーズは大ベストセラーとなっている（『永井柳太郎氏大演説集』は昭和10年初頭には146版を重ねた）。演説が行われた日時と場所が記載され、聴衆の反応（拍手や野次）も再現されており、新聞広告の「（演説を）聴け！」

というフレーズからもリアルさを強調していることがわかる。

自由民権運動の衰退、治安警察法（1900年）の影響などによる演説の沈滞期を経て、1910年に創刊された雑誌『雄弁』は、演説を通じて新たな段階に入った日本を建設していこうという抱負を掲げ、演説の復興の画期となった。巻頭には毎号、各校の弁論部の写真が掲載され、学生弁論大会を主催するなど、全国の弁論部ネットワークの形成に影響を与えた。その後、大正デモクラシーの隆盛に伴い、尾崎行雄や犬養毅が「演説の神様」となり、やがて永井柳太郎や中野正剛、鶴見祐輔らも雄弁家として著名になっていった。

この時期に演説を録音したレコードが登場したことは重要である。1915年の尾崎行雄と大隈重信を最初に、その後、多数の演説レコードが発売・配布された（現在、約90題目の存在が確認）。演説レコードはその録音形式によって性格が異なる。ライブ録音のものは、実際の演説の声質・声量・速度、聴衆の反応を知ることができ、大変興味深い。一方、録音時に草稿を持ち込んで朗読しているものは、文字言語の要素が介在していることに注意が必要である。演説の時期なども考慮して分析する必要がある。演説レコードは、昭和館などに多数保存されており、試聴可能となっているが、研究資料として活用されているとは言い難い状況である。今後、方法論の確立が求められているといえよう。

演説レコードを聴くと、演説の多様性に驚かされる。論理型の代表とされる尾崎行雄は簡潔かつ明快に主張を展開しているが、若干地味な印象を受ける。一方、レトリック型の代表とされる永井柳太郎は、声量が非常に大きく、発音が明瞭で、主張は簡潔でレトリック過多という程ではないが、速度が遅くゆったりとした演説で、思わず眠気に誘われるほどである。対照的なのは中野正剛で、まくしたてるように鋭く主張を展開していく。

おわりに

では、現在の雄弁家、オバマの演説はどうか。オバマの演説は声量の大きさ、発音の明



『永井柳太郎氏大演説集』（大日本雄辯会講談社）の新聞広告

瞭さ、主張の簡潔さ、魅力的な言い回しなどが特徴と言える。もちろん単純に比較することはできないが、永井柳太郎が「革新」をキーワードに、「藩閥打破」「日本は日本人の日本」であることを主張し、日本を一つにまとめようとしたことをオバマが「change」をキーワードに「黒人のアメリカも白人のアメリカもなく、アメリカ合衆国がある」と繰り返し主張し、アメリカを一つにまとめようとしていることには、共通する何かを感じざるを得ない。演説のちからで社会に変革をもたらそうとする者にとって、普遍的な問題があるのかもしれない。おそらく、時代も国も異なる両者に共通するのは、分断されている人々を一つにまとめようとする意思である。その意思が「演説のちから」を必要とし、両者を雄弁家にしていったのだと思われる。しかし、言うまでもなく、その意思は「ナショナリズム」の問題を避けて通ることはできない。永井は「転向」を余儀なくされたが、オバマは永井がたどった道を回避することができのだろうか。時代や日本とアメリカの社会のあり方の違いを越えて興味深い問題である。



本稿は、非文字資料としての演説の特徴と分析方法について、ごく限られた範囲について基本的な論点を指摘したにすぎない。これまでの成果を踏まえ、今後は演説研究の普遍的かつ体系的な分析方法の確立を目指し、演説という視点を通じて新たな歴史像を再構築していきたいと考えている。

〈参考文献〉

- ・高野宏康「演説のちから―戦前期の金沢における永井柳太郎の政治活動―」『歴史民俗資料学研究』第12号、2007年3月。
- ・高野宏康「雄弁家としての永井柳太郎―四つの演説論の分析を中心に―」『歴史民俗資料学研究』第13号、2008年3月。



『オバマ演説集』（朝日出版社、2008年）表紙

海外研究機関との提携

非文字資料研究センターでは、非文字資料にかかわる学術情報の交換を行うとともに、国際的な感覚を有する次世代の若手研究者の育成を目的とした研究者派遣・招聘事業を行うために、海外の研究機関との交流・提携事業を進めています。2008年度には下記6つの研究機関と提携を結びました。

2008年度の提携機関

中 国	北京師範大学文学院 民俗学与文化人類学研究所 華東師範大学 中国民俗保護開発研究中心 浙江工商大学 日本文化研究所 中山大学 中国非物質文化遺産研究中心
カナダ	ブリティッシュ・コロンビア大学 アジア学科
ブラジル	サンパウロ大学 日本研究所

奨励研究制度

非文字資料研究センターでは、非文字資料に関する研究者の育成を大きな目標として掲げ、独自の奨励研究制度を設けています。本制度は、世界的な研究拠点として、世界に通用する研究者育成のため研究費の支援を学内公募によって行うものです。審査の結果、2008年度は以下3名の研究が採択されました。

研究課題

のぞきからくり
西日本の民家における土地神の信仰の分析
『一遍聖絵』の図像学

氏名（所属）

坂井 美香（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
三村 宜敬（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
佐々木弘美（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）

ホームページ開設予定

非文字資料研究センターのホームページが開設される予定です（3月下旬）。

<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

主な研究活動

(2008年10月～2009年2月実施分)

運営委員会

- 第5回 10月1日・本年度予算執行、2008年度公開研究会について 他
第6回 10月22日・COE事後評価結果、研究協力者委嘱、2008年度奨励研究審査、図書・資料の収集方針、ホームページ（案）、第2回公開研究会開催、中山大学との学術交流について 他
第7回 11月26日・研究員人事、グローバルCOEへの対応、海外学術交流機関との提携・若手研究者の招聘（受入態勢）・派遣、第3回公開研究会、只見町との研究協定更新について 他
第8回 1月7日・2008年度予算の組替え、21世紀COE事後評価の諸対応、年内刊行物の編集状況、第3回公開研究会の企画、COE保存資料の管理について 他
第9回 1月28日・2008年度予算の組替え、奨励研究者の海外出張、奨励研究費の予算変更手続き、COE関連ブックレット企画、COE関連公開講座企画、センター・ホームページの業者説明会およびプレゼン、年内刊行物の編集状況、海外提携研究機関との覚書締結状況について 他

研究員会議

- 第4回 12月3日・COE事後評価結果および2009年度グローバルCOE申請、只見町との研究協定更新、基幹研究会・課題別研究会報告提出、研究協力者の委嘱、中山大学との学術交流、海外学術交流機関との提携・若手研究者の招聘（受入態勢）・派遣、2008年度奨励研究審査結果、公開研究会開催状況および企画、ホームページ準備状況、図書・資料の収集方針について 他
第5回 2月6日・2008年度予算の組替え、21世紀COE事後評価の正式公表に伴う諸対応、2008年度事業報告および2009年度事業計画、2009年度研究員人事、センター・ホームページの準備状況、第3回公開研究会（2009年3月14日）、海外学術交流機関との覚書締結状況、浙江工商大学日本文化研究所との研究者交流について 他

研究会

全 体

- 第2回 12月3日 福田アジオ「図像資料と民俗学」
高野宏康「東京慰霊堂調査・経過報告」／北原糸子「関東大震災と避難民」
第3回 2月6日 貴志俊彦「戦前在華『外国人』人口統計データベースを量した地域人口分析」
大里浩秋「同仁会機関誌に見る現地日本人居留民」

研究班

- 10月21日、28日、12月2日、16日 関東大震災後の都市復興過程とそのデータベース化、並びに資料収集 研究会
10月1日、11月19日 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂共同研究 研究会
11月26日、12月12日、1月16日 非文字資料研究ネットワーク形成研究 研究会

現地調査

北原糸子、田中傑、高野宏康
東京都墨田区 東京都慰霊堂 (10月7日、11月4日、11日、14日、18日、21日、25日、28日、12月10日)
関東震災に係る資料収集調査
北原糸子、田中傑、高野宏康
東京都中野区 三井文庫 (10月14日)
関東震災に係る資料収集調査
福田アジオ、大里浩秋、田上繁、金貞我
韓国ソウル特別市国立民俗博物館・漢陽大学校博物館他 (2009年1月22日～1月24日)
海外ネットワーク形成のための研究機関訪問および協議

編集後記

センターが実際に活動を開始してから半年、21世紀COEの事後評価結果が正式に確定しました。結果は、Aランクということで、上々の評価でした。評価されたことは喜ぶべきことですが、それだけの評価を受けた以上、21世紀COEの後継事業であるグローバルCOEにも応募すべきだ、という当然の声が出て、その申請の準備にとりかかりました。またまたCOEという大事業に取り組むことになるかどうかはわかりませんが、非文字研究の世界化のためには、もう一踏ん張りしなければと覚悟をきめました。

表紙の写真は、明治時代に日本の文化や風俗を紹介するために外国向けに出版されたチリメン本の一冊から取ったものです。縮緬のような特殊な用紙を使い、カラーで美しく仕上げた本で、たぶんお土産用だったかもしれません。ただそこに描かれた風景・場面は、当時の日本が、どんな風に自分の文化や風俗を認識し、世界に向けて発信しようとしていたのかを知ることができる図像資料として興味深いものです。（橘川）

神奈川大学21世紀COEプログラム研究成果講座(第1期) 図像資料から読み解く生活文化

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」で達成した研究成果を分かりやすく講義する連続講座を開催します。

第1期の講座では、COE プログラムの大きな柱の一つであった図像資料の研究成果を披露。絵引編纂の成果に基づいて、絵画資料を読み、日本、韓国、中国の生活文化を明らかにします。

●全4回 毎週水曜日 13:00~15:00

第1回 5/27 『東海道名所図会』にみる生活

福田アジオ

第2回 6/3 『姑蘇繁華図』が教える江南地方

鈴木陽一

第3回 6/10 描かれた朝鮮時代の文化を読む

一風俗画のなかの女性

金 貞我

第4回 6/17 絵画資料から読み解く江差浜と松山の生業と生活

田島佳也

●定員: 50 名

●受講料: 4,000 円 (全 4 回)

●会場: KU ポートスクエア

<http://www.ku-portsquare.jp/about/access.html>

●申込期間: 3/10(火)~5/13(水)

※お問合せは、広報部広報事業課: TEL 045-481-5661(内線 2231)

神奈川大学非文字資料研究センター 第3回公開研究会 「震災復興と文化変容

—関東大震災後の横浜・東京—

参加
無料

●日時: 2009 年 3 月 14 日(土) 10:00~16:20

●場所: 横浜 ランドマークタワー 25 階 2501 大会議室

基調講演

西村幸夫 (東京大学教授) 「震災復興の都市計画とその現代的意義」

原 武史 (明治学院大学教授) 「震災と天皇・皇室」

パネリスト

真野洋介 (東京工業大学准教授)

「関東大震災後の避難行動と市街地形成」

水沼淑子 (関東学院大学教授)

「横浜市営住宅事業にみる震災復興」

田中 傑 (芝浦工業大学 PD 研究員/非文字資料研究センター研究員)

「関東大震災後のバラック—再建のプロセスと法規との関係—」

寺崎弘康 (神奈川県立歴史博物館専門学芸員)

「横浜の震災復興博覧会」

北原糸子 (神奈川大学教授/非文字資料研究センター研究員)

「震災前後—町内会の変貌」

コーディネーター

川西崇行 (早稲田大学講師)

司会・進行

北原糸子 (神奈川大学教授/非文字資料研究センター研究員)

後援: 日本災害復興学会・歴史地震研究会

※お問合せは、非文字資料研究センター: TEL 045-481-5661(内線 3532)

神奈川大学非文字資料研究センター・上海東華大学人文学院 第4回公開研究会「租界研究の現段階」

●日時: 2009 年 3 月 28 日(土) 10:00~17:00

●場所: 中国 上海文廟会議室 (予定)

報告者

孫安石 (神奈川大学准教授) 「上海の The North China Herald と日本の山東出兵関連の報道について」

貴志俊彦 (神奈川大学教授/非文字資料研究センター研究員)

「戦前在華『外国人』人口統計データベースを利用した地域人口分析」

富井正憲 (漢陽大学校教授) 「上海、青島、仁川における日本紡績工場従業員宿舎比較」

韓東洙 (漢陽大学校教授) 「仁川における日本と清国の租界」

李百浩 (武漢理工大学教授) 「漢口における租界建造物の保存」

羅蘇文 (上海社会科学院研究員) 「上海租界文化研究の現状」

司会・総括・コメンテーター

大里浩秋 (神奈川大学教授/非文字資料研究センター研究員)

陳祖恩 (上海東華大学教授) 徐蘇斌 (天津大学教授)

『歴史民俗資料学研究』14号

●2009 年 3 月発行予定 A5 判

●発行: 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

●内容 (予定)

・聞き書きと船図面に基づく造船技術の研究—利根川流域を事例として—(及川晃一)

・南北朝正閏問題に関する一考察—歴史学・歴史教育・民衆、

それぞれの歴史意識—(古宮千恵子)

・覗きからくりとは何だろう—日本、西欧、中国—(坂井美香)

・日本武術の黎明と「夢想神伝」について(對馬陽一郎)

・唐其研究の動向と問題点(内藤大海)

・牧畜儀礼の一環としてのオボー祭祀—内モンゴルオトク前

旗ボルトロギン・オボー祭祀の事例から—(ナランビリゲ)

・命あつての修行なり—まざりあう欲求と希望、ある寺院の

托鉢から—(渡邊徳子)

・横浜専門学校における学徒勤労動員 (齊藤研也)

・『古事記』における百濟・新羅の位置づけ (福田武史)

・群馬県内における道祖神の伝播—上州の四街道を中心に—

(鈴木英恵)

・酒造業研究私考(八久保厚志)

神奈川大学日本常民文化研究所論集 25 『歴史と民俗』25

●2009 年 2 月 20 日発行 平凡社

特集: ことばの力—文字と音声との間にあるもの

解題: 小馬 徹

・読むこと、書くこと、話すこと—声から見た中世ヨーロッパ (岩波敦子)

・祝詞と宣命における口誦性 (山本幸司)

・明治期の子どもたちと源頼光の物語 (鈴木 彰)

・宣伝広告から「国民文学」へ—ケニアの新混成言語シェン語の力 (小馬 徹)

・究極の建築 (西 和夫)

・海人のむらの民俗誌から(下)—宇久島・平 調査ノート(香月洋一郎)

・網野善彦の資料学【第11回常民文化研究講座の報告】(佐野賢治)

非文字資料研究 No.21

発行日 第21号 2009年3月10日発行

編集・発行 神奈川大学 非文字資料研究センター

日本常民文化研究所

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,

Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659